

子どもと純粹に向き合う

保育の場を

津守 真

身体の動きに合わせて動くこと

保育者が子どもの身体の小さな動きに敏感になること、そしてそれに答えて動くことは、保育の出発点である。

身体の動きには、無意識の心の動きがあらわれる。

子どもの身体の動きに合わせて、静かに、同じように自分も身体を動かすと、子どもの心の動きが伝わってくる。それも殆ど無意識の作用である。

子どもの身体の動きとは逆の方向から答える場合もある。たとえば、子どもが物を差し

出すとき、私は手を出してそれを受け取る。それによって、子どもの私に向けられた好意が伝わり、受け取る私の関心もまた相手に伝わる。

私がつと別の身体の動きを工夫して動くときもある。たとえば、子どもが手を横に出したとき、私は手を上にあげる。子どもが走るとき私は歩く。それによって、私は子どもとは違う自分の動きに気が付くし、子どもは違った方向から自分の身体の動きを意識するだろう。

これまで私が子どもとゆっくりとつきあうと言ってきたことは、こうした身体の応答であることに私は気が付いた。

このようにして子どもと身体の応答をすることによって、私は自分だけの動きのルールから出て他者と出会い、その他者に合わせて違う動きをなしうる自分を発見する。

そのとき、子どももまた、外部から動かされる自分ではなく、たとえ小さなものであっても、自分の心の中から新たな可能性が開かれることを体験するであろう。

このことが連続してゆくと、子ども自身の内部は次第に温められ、熱せられて、自分自身の表現が形をなしてくる。

遊びに、あるいは作品に、子どもの内心の悩みや、願望が形を成して表現されるのはこのようなときである。

このことは、保育者が、程度の差こそあれ、毎日経験していることである。

前提

身体の動きに応答する以前に前提になることがある。それは、子どもに親しまれる存在になること、どの子どもにも、あるがままで価値を認めることである。

まず自分が子どもにとって近づきやすい存在になるにはどうすればよいかを考え、そのようになること。それぞれの子どもが、変化しなくとも、いまのままで価値があることを心から認めること。ことが話せるようにならなくても、もっとうまくできるようにならなくとも、そのままでも立派な子どもである。人はひとりひとり違う。違う故に価値がある。

ただし、子どもの小さな身体の動き、心の動きに敏感でなければならぬ。

保育の場

子どもの中に、新たな可能性が開かれるようにと、大人と子どもとが純粹に向きあうことがゆるされる場があることは、有り難いことである。そのことを課題とした空間と時間が保育の場である。幼稚園、保育園、学校は、本来そのような場である。

子どもと純粹に向き合うには、大人自身が、自由で柔軟な心になっていなくてはいけない。そうでないと、大人はかえって子どもを縛り、その可能性を閉ざすことになる。保育の場は、大人も、自分が創造的になることを純粹に課題とする場である。

日常生活の中では、しばしば、大人は日常の必要にのみひきずられ、その観点からだけ子どもとかわり、他の可能性を見ることが困難になる。専門的な保育の場は、子どもと

向き合う場である。

保育は、毎日のことであり、長時間である。また、複数の子どもや大人が一緒の場である。その点で、カウンセリングやセラピーとは違う。保育の場では、子どもが人を選ぶ自由、人から離れる自由がある。そこで子どもはゆっくと自分自身を出して、自分の生活をつくり、共同の生活をつくる。

保育の場で新たな可能性を開かれた子どもは、日常生活にもどり、それを変える力をもつ。

日常生活のただ中に、保育の場を創り出すことも可能である。それがなしえられるときは幸いである。



(愛育養護学校)